

項目	具体的取組	◇成果と◆課題	改善策・向上策
重点目標1 教育課程・学習指導	ICT、教科連携、主体的・対話的な学び等を取り入れ、学びの質を改善し、よりわかりやすい授業づくりに取り組む。	◇ルーブリックを用いた評価の改善を軸に授業改善を進めて3年目となり、教職員アンケート結果からは、全教職員に「育てたい資質・能力」を意識した授業展開が定着していることが読み取れる。 ◇昨年度まで比較的数値の低かった50代教職員(本校教職員の過半数を占める)の意識改革が顕著であり、同年代の意識の変化は、学校評価アンケートそのものへの参加率の向上ともつながっている。 ◆授業改善の意識が高まった一方でパフォーマンス評価への取組は若干低い。今年度は2ヶ月間の臨時休校があり、授業の遅れからALの時間確保に困難が生じたことが要因と思われる。	○令和3年度を新教育課程実施の予行練習期間と位置付け、観点別評価を現課程での評価と新課程視点での評価の2パターン実施を進める。新課程での評価を進めるためには、主体的・対話的な学びや、ICT活用が今まで以上に必要不可欠な要素となることを意識付ける過程で、授業改善の足がかりにしていきたい。 ○タブレット全員導入による課題提示・回収方法の改善や、新課程評価のためのポートフォリオ蓄積のためにICTを有効活用していく。
	各種媒体を活用した学びの履歴により、自分自身の活動を省察する。	◇全学年Classiを導入済みであり、ポートフォリオ(学びの履歴)の蓄積ができる環境が整った。また、年度当初の臨時休校時の課題提示がClassi経由で行われたこともあり、Classiの認知向上も進んだ(積極的に取り組めた生徒が昨年の20%増)ことから、ポートフォリオ活用の意識も高まった。 ◇中でも特に3年生においては、ポートフォリオを受験に活用するためにClassiの有効活用が進んだ。その結果は本学校評価(生徒用)のデータ収集をClassiで入力する形式にした際、3年生参加率99.4%に達したことからもわかる。 ◆2年生の学校評価参加率72.6%(昨年比-17.3%)から、認知度が高まったClassiであるものの、その利用方法に関しては多くの課題を抱えていることが想像できる。学びの履歴の蓄積・自身の行動の省察等の活動が、新入試制度の中でどれだけの重要性を持つかという意識差が学年間にあると思われる。	○eポートフォリオ導入が見送られたことで、Classi存在意義の再確認を行ったところ、費用対効果の視点から撤退すべきとの結論に達した。今後は、県下一斉に導入されるタブレットやGoogle Classroom等を活用してポートフォリオの蓄積、各種教材提示等を行う。 なお、このタブレット活用をスムーズに実施するための教員スキルアップ研修も令和2年度中に複数回実施した。
重点目標2 進路指導	進路実現のために必要な情報を自主的・主体的に収集できるよう支援する。	◇2ヶ月間の臨時休業により、当初計画通りの進路指導カリキュラムを遂行することはできなかったが、柔軟に様々な活動を通して支援することができた。このことは、進路ストーリーに基づく活動に関する評価(教員82.2%、生徒82.7%)、進路実現に向けた生徒の自主的活動支援(教員88.9%)からも読み取れる。 ◇特に3年生には、新入試制度1期生となるため、LH・総合的な学習の時間を効果的に活用して、変更内容の周知を進めたため、eポートフォリオに関すること等の急な変更にも落ち着いて対処することができた。 ◆保護者からは、学校から必要な進路情報を得ることができたという評価が若干低く(昨年度よりも4%低下)なっている。集合型の保護者研修にも感染症対策のため制約があったこと等が影響した可能性がある。	○生徒の自主学習時間を増加し、その時間等を活用して実践すべき「学びのグランドデザイン」を明確に示す。 ○LH計画を見直し、情報提供・収集の場を定期的に設定する。また、新入試1年目の省察を進め、すでに課題として上がっている志望理由と志望校とのマッチング等の各種作業・面談を前倒して実施する。
	3年間の進路ストーリーに基づき、個々の進路目標に応じた進路指導を行う。	◇各学年において進路ストーリーを明確に示した上で、進路指導を実践していることの評価は着実に出てきている。 ◇秋の受験指導(総合型選抜等)に関する個々の生徒に対する目標達成までの指導プロセスは、教職員全体に意識の高まりがあった。特に中堅以上(本校教員の8割以上に相当)において、9割をはるかに超える高い評価がある。 ◆個別指導の充実に伴い、教員の業務多忙化も進んでいる。この分野に関しては、業務改善・削減の視点ではなく、教員内での業務均一化について検討を進める必要性が感じられる。	○「学びのグランドデザイン」中に進路ストーリーも組み込み、全生徒に早期に提示する。 ○現在、個々の教員の力量に頼ることの多い個別指導を組織的に実施するため、教員研修会を開催する。 ○3年ホーム担任・副担任の業務負担均一化を実施するとともに、1・2年次段階で対応すべき項目を見える化する。
重点目標3 生徒指導	校内ルールやマナーに対するコンプライアンス意識を高め、社会性の育成に努める。学校行事や部活動に積極的に参加し、リーダー性、個性、協調性の育成に努める。	◇2年生においてルールやマナーを意識した生徒指導がなされているとの評価が高い(83.9%)。同学年では、学年独自SNS利用やいじめ等に関する調査を定期的に行い、状況把握に努めていることがこの結果に繋がったと思われる。 ◇コロナ禍の中で新しい学校祭を、生徒の声を最大限に取り入れ実施した。様々な制約がある中、自分達の意見がそのまま運営に反映される喜びを感じるす姿は、各行事が学校生活を充実させるものになっているという評価に繋がったと思われる。 ◆1年生では、ルールやマナー遵守に関する評価が低下した(前年比-4.3%)。入学前の長期臨時休業の影響をふまえ、学校再開後にルール遵守よりも仲間作りを優先する学年会の方針が少なからず影響している模様である。	○生徒の声を学校改善につなげる動きをR2年度以上に推進し、その過程を「生徒会便り」等を通じて見える化していく。 ○ワールドビジネスフォーラムの生徒運営委員会や特色選抜合格者を軸にHino・Questを自主的に推進していく組織等を通して、生徒自身が自主的に学校を盛り上げる雰囲気醸成していく。 その活動を支援する専門の校務分掌は創設済み。
	健康に関する啓発活動を生徒自らが実施できる力を育成する。美化委員会の活動を活性化し、清掃活動の徹底と習慣化を図る。	◇2年生において安全な学校生活に対する配慮の評価が高いのは、学年独自の定期的なアンケート調査とその結果に対する迅速な対応を評価していると思われる。 ◇1年保護者でも同様な高評価になっているが、長期臨時休業明けに、大規模な個人面談・教育相談カウンセリングの時間を設定した影響だろう。 ◇ボランティア活動に関する生徒自己評価が高いのは、九州豪雨被災者向け募金、布マスクの市内小学校向け寄付活動等の自主的企画によるものであろう。	○学校安全・美化に関する外部からの厳しい評価をふまえ、学校行事(健康安全体育、勤労生産奉仕的行事)の見直しを行い、実施時期・目的・運営方法等の大幅拡充を実施。 ○学校安全委員会・学校安全計画・危機管理マニュアルの形式化を打破し、具体的に機能させるために、校務分掌を再編(保健部を解体)したあとの新分掌を中心にプロジェクトを立ち上げる。

項目	具体的取組	◇成果と◆課題	改善策・向上策
重点目標4 積極的な情報発信	公開授業、地域の小中学校との交流などを行い、日ごろの学習成果を発揮させる。	◇国際科スピーチ発表会の公開、小学校外国語活動支援等の諸活動を拡充してきたが、コロナ禍の中で順調に進まなかった部分もある。 ◆国際科の学習成果発表の場面設定はあるものの、普通科に同様な設定が欠けている。Hino・Quest実践発表等、普通科・国際科を問わず活動できる企画が必要だと思われる。	○小学校外国語活動支援は、近隣の小学校において年間を通した継続的活動を進める計画が進行中。 ○2年生を中心にHino・Quest実践発表の場としてワールドハピネスフォーラムを企画。オーディエンスとして地元市民への開放も検討。
	HP・広報誌・学校見学等を通して、校内外における生徒の活動等を保護者・地域に積極的に発信する。	◇国際科スピーチ発表会の公開、部活動見学会の開催、各中学校での学校説明会時での生徒活動状況動画上映と次々に新規企画を実現させ情報発信に努めた。 ◇学校新HPでは前年比で2倍以上の頻度での情報発信を行うとともに、緊急連絡事項発信の複線化(緊急メール発信・学校HP配信・Classi配信)を進めてきた。今年度の度重なる緊急対応をトラブルなく周知できたのは、これら緊急連絡体制の整備によるところが大きい。 ◆情報発信に対する保護者評価は昨年に比べ低い(特に2・3年)。 2年生においては、修学旅行延期・中止に関する情報提供不足が、3年生においては学校祭動画配信をしなかったことが影響している可能性が高い。 (学校祭動画配信中止は、生徒の映像をインターネットを活用して配信することの同意が得られなかったために中止)	○校務分掌再編の中で、本校の特色・柱となる教育活動担当と広報部門を合体した新部門を設立。一層迅速な情報発信が可能な体制を構築した。 ○今年度のノウハウ・反省を活かした修学旅行延期時の対応は稼働を始めており、5月PTA総会時には保護者説明を実施する。
重点目標5 学力向上	総合的な探究の時間等を活用して、自分の考えをわかりやすくまとめ、他者に伝えることができるようにする。	◇生徒・教員とも「主体性」「発信力」「コミュニケーション力」等に関する意識の高まりがある。Hino・Questによる取組、日々の授業中でのAL推進が定着してきている表れであろう。 ◇特に2年生における「コミュニケーション力」「協調性」の伸長は、Hino・Questをグループ活動に切り替えたことによる成果である。	○9月実施のワールドハピネスフォーラムという大きなイベントを目標に設定し、「主体性」「発信力」「コミュニケーション力」の育成に努める。 ○高大連携や各種全国発表会を活用し、自分の探究活動を発信できる場を全生徒に提供する。
	授業を中心として、生徒同士の学習会や面接練習を定期的に実施し、英検取得率を高める。	◆外部試験に関する取組を教員・保護者とも後退したと感じている(教員-5.1%、保護者-3.3% 特に2年保護者は-16.1%)。現3年生は新入試での外部試験活用を前提に積極的指導があったが、現2年では導入中止が決まったことで積極的指導をしなかったことの表れだろう。	○令和2年度に安全教育の一環として生徒に強く意識させた「自助共助」を昇華させ、外部試験等の学びにおいても「自学共学」を意識付けしていく。(放課後の自主学修時間の有効利用)